

国内出土の蝙蝠座鈕内行花文鏡についての一考察

～福岡県前原市潤地頭給遺跡出土鏡を中心として～

江野道和（伊都国歴史博物館）

I はじめに

前原市教育委員会が平成14・15年度に実施した潤地頭給遺跡^{うるじ とうきやう}の調査では蝙蝠座鈕をもつ内行花文鏡が発見された。出土遺構および時期については攪乱を受けており、詳しい全体像に迫ることが困難であったものの、割竹形または舟形などの刳拔式の木棺を主体部にもつ墓である可能性が考えられた。また、鏡の出土状態は、ばらばらに割れて散乱していたため、故意に破碎が行われた可能性も考えられた。

このような蝙蝠座鈕をもつ鏡の出土はかつての伊都国の領域内に焦点を絞ると、三雲寺口遺跡例に次いで2例目であったが、銘文・圈帯などの細部については相違点も見られた。

本稿では、潤地頭給遺跡出土鏡を同種の鏡と比較することによって、この位置付けを考えることとし、まず今回は、国内のものに絞って見て行きたい。

II 研究略史

ここでは蝙蝠座鈕をもつ鏡の研究史の概略を過去にさかのぼって見て行きたい。

まず、蝙蝠座鈕が認識される以前の状況を見ていくと、基礎となる鈕座の研究については三宅米吉氏^{註1}や高橋健自氏^{註2}の論考がある。このうち後者の高橋氏は鈕座を分類する中で、四葉座を2種類に分類するなど、後の研究の素地を作ったといえる。

この高橋氏の論考が発表された後、香川県高松市に所在する猫塚古墳からの鏡の出土を契機として、研究は新たな段階に入ったといえる。各論考において、蝙蝠座鈕の様式論や時期論が交わされることとなるのも、これ以後である。しかしながら、いわゆる「蝙蝠座鈕」という名称についてはまだ固定化しておらず、特に、古い論考ではもっぱら「変形鈕座」として紹介されており、四葉座鈕の中の特殊な形態としての捉え方が強い。また、これと併行して、補助的に「蝙蝠形」・「蝙蝠様」・「蝙蝠状」などの用語も使われる。

また、この頃には蝙蝠座鈕の型式的な位置付け

を巡って、議論が交わされるようになる。議論の焦点は主に発生論に係わるもので、四葉座鈕からの変化を考える説と清白鏡などの連珠文座から発展したと考える説の2つがある。これらの説について、前者は主に富岡謙蔵氏^{註3}・矢島恭介氏^{註6}が唱え、後者は中山平次郎氏^{註4}が採る。また、後藤守一氏^{註5}は基本的に前者の説に沿うが、実際は両者が並存または順序が逆転しているものがあるという指摘を行っている。なお、蝙蝠座鈕の終焉としては、夔鳳鏡や獣首鏡の糸巻き方に変化することの見方がほぼ定説化する。

ここまで取上げた議論から一歩進んだ形態分類を試みたのが梅原末治氏^{註7}である。その方法とは蝙蝠座鈕を含む内行花文鏡を分類する上で、鈕座と連弧文帯の間にある圈帯^{註8}や連弧文間に配される単位文様に注目するもので、圈帯のある大型品、同じく圈帯があり単位文様^{註9}もあるもの、両方ともない簡単なものの3つに分類する。このような、圈帯や単位文様などの要素を抽出する方法は、今日の分析においても普遍的に行われている作業の一つであり、この梅原氏の論考をもって、研究は現在に近い新たな段階に入ったといえる。

これに続く、樋口隆康氏は先学の学説をまとめるとともに、これをさらに発展させた詳細な分類を試みている^{註10}。注目したのは、鈕座・外帯・中帯の3つの要素で、それぞれについて、A～C、a～c、ア～エに分類し、蝙蝠座鈕をもつものについては、鈕座をB、外帯は櫛目文をもつbまたは素文のc、中帯は平頂素圏のイと圈帯なしのエとした。

また、立木修氏は、高橋徹氏の分類^{註11}を基礎として、蝙蝠座鈕などの凹帯をもつ鏡の型式を付け加えた^{註12}。具体的には高橋氏が行ったⅠ～Ⅳの型式にⅤ～Ⅶの分類を新たに付け加えたもので、Ⅵ式を蝙蝠座鈕で無文の凹帯をもつもの。Ⅶ式を蝙蝠座鈕または四葉座鈕をもつもののうち、雲雷文の渦文・同心円文が簡略化されたものとした。そして、時期的な変遷は最後のⅦ式のみを外し、単純にⅠ式からⅥ式まで順次に変遷すると考えた。

また、近年、岡村秀典氏は圈帯の有無による簡

易な分類を確立し、圈帯をもつものをⅠ式、圈帯をもたないものをⅡ式とし、時期的には、Ⅰ式を古式として位置付け、Ⅱ式への変遷を考えた^{註13}。

Ⅲ 国内における鏡の分布

全体的な分布状況（第1図）を見ると、南は宮崎県から東は群馬県までの広範囲から出土していることがわかる。しかしながら、分布の密度を見てみると北部九州の中でも圧倒的に福岡県内の出土事例が多く、全体の約半数が集中する。

また、岡村氏のいうⅠ式とⅡ式の分布状況を見ると、福岡県内は両者が混在しており、東へ行くにしたがって、例外を除き、Ⅰ式が多い傾向にある。



第1図 蝙蝠座鈕（内行花文）鏡出土遺跡分布図

Ⅳ 型式分類

本論における蝙蝠座鈕の形式分類は、岡村氏の分類が現在の研究上広く使われていることに鑑み、これを基とした上で、さらに細分化を試みたい。

具体的には、岡村分類のとおり、圈帯のあるものをⅠ式、ないものをⅡ式とし、これを蝙蝠座鈕の形態や圈帯、連弧文間の単位文様などの要素にしたがって5つに細分化する（第2図）。

まず、Ⅰ式についてはa～dまでの4つに細分する。aは蝙蝠座の先端が短く、未発達で圈帯にまで達しないもの。bは蝙蝠座の先端が伸び、圈帯と先端が接するもの。cは先端が圈帯を突き抜けて円文などの連弧文間に配された単位文様と一体となったもの。dは圈帯の幅が狭くなったものや線圈となったものとする。

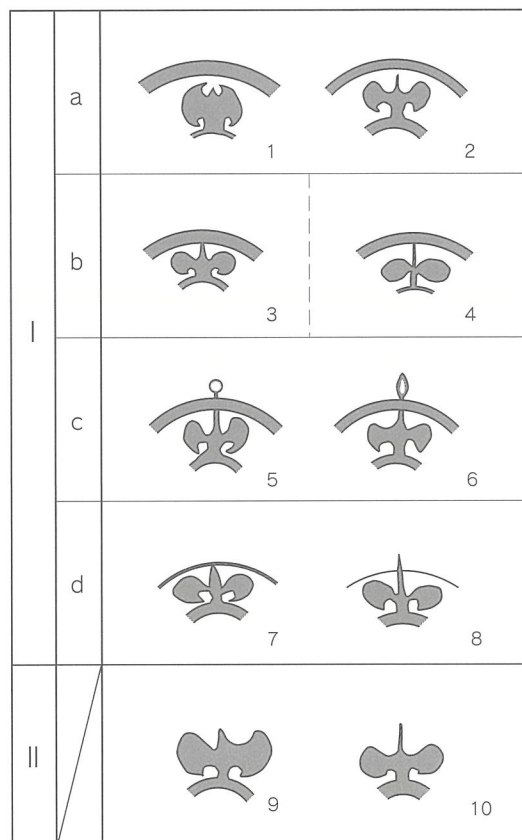
続く、Ⅱ式については先端の長短によって分類が可能であるが、この方法では主観的な方法となりがちなことから、ここでは分類を行わないこととする。

それでは、以下に例を挙げながら見ていこう。

Ⅰ-a式 福岡県御笠地区遺跡（7）や同県谷頭遺跡（12）などが挙げられる。このうち、谷頭遺跡出土の鏡は、先端の突出が極めて短く（第2図-1）、同じ型式に位置付けた御笠地区遺跡出土のもの（第2図-2）と形態が大きく異なる。これが、時期的な要因によるものか、他の理由によるものなのかは、今後の検討が必要である。

Ⅰ-b式 分類を行った中で、最も数量が多い。特徴としては、Ⅰ-a式と比べ、面径が大きくなる傾向にあり（第3図）、銘文をもつものの割合が高いという点が挙げられる。

この型式の文様を詳しく見ていくと、大きく3つに分けられ、連弧文の間に銘文を配するものと、円形の単位文様を配するもの、両方を配するものなどが含まれることが分かる。このうち、銘文を



第2図 蝙蝠座鈕の分類図

配するものについては、福岡県久原遺跡Ⅲ-4号墳出土鏡（9）、宮崎県伝広島古墳群出土鏡（16）などが挙げられ、いずれも「山」や「金」など左右が対称な文字の中軸線と蝙蝠座の先端のラインが揃う。また、円文を配するものについても、蝙蝠座の先端を意識した配置が成されており、なかでも京都府今林古墳群出土のもの（30）は単位文様が圈帯に接する部分があり、次の段階のⅠ-c式への過渡期に当たると考えられる。

なお、福岡県老司古墳出土鏡（4）と次のⅠ-c式に属する京都府美濃山出土鏡（29）については、鈕座の形態がいわゆる双葉状になっており（第2図-4）、連弧文帯と鏡縁の間に凹帯ではなく、櫛歯文や同心円を巡らすという点で特異な形態をとる。しかし、鈕座と単位文様のそれぞれの中軸線が揃うという共通点も見られる。

Ⅰ-c式 この型式については、梅原氏が指摘しており^{註14}、古くから知られていた。香川県猫塚古墳（19）、鳥取県伝倉吉市上神（24）などの例が挙げられ、このうち、前者の単位文様は円形であり、後者の文様はやや変形した涙滴形となる。前出のⅠ-b式では円形の単位文様が用いられていることから、円形の方が先行し、涙滴形に近い方は鈕座との一体感が強まった一歩進んだ形態の可能性がある。面径としては、前出のⅠ-b式とほぼ同じか、心もち大きなものが出現する（第3図）。

Ⅰ-d式 樋口氏の分類にない形態で^{註15}、兵庫県白鷺山（25）や潤地頭給遺跡出土鏡（7）などが挙げられる。このうち、潤地頭給出土鏡は連弧間の文様がなく、先端は長く延び、線圏を突き抜けている。面径は小型化しており、Ⅱ式への連続性が見られる。

Ⅱ式 普遍的な要素を抽出できなかったので細分化していないが、大まかに蝙蝠座鈕の先端が長いタイプと短いタイプとがある。前者は福岡県前田山遺跡（14）、山口県朝田墳墓群（20）、島

根県岡田山1号墳（22）などからの出土鏡が挙げられ、こちらがほとんどを占める。また、後者の短いタイプは静岡県銚子塚10号墳出土鏡（32）がある。

前出のⅠ-d式の潤地頭給遺跡出土鏡と鈕座の形態についての連続性が見られるのは前者の先端の長いタイプである。また、面径については、小型のものが多い傾向にある（第3図）。

V おわりに

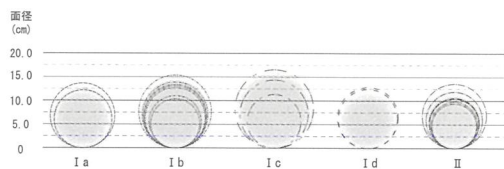
ここでは型式の変遷と潤地頭給出土鏡の位置付けについて考え、簡単なまとめをしたい。

まず、時期的な変遷については、研究略史で述べたとおり、大まかには岡村氏のいう圈帯をもつⅠ式を古式とし、圈帯を省略したⅡ式への変化を考えてよいものと思われる。それではこのたび細分化したaからdまでの4つの段階がどのような関係になるのであろうか。順序が前後するが、まずbとcとの関係を見ていくと、bの段階では鈕座の先端に円文が配置されるもの以外に銘文が配置されるものがあり、未だ、形態が定まっていない。これと比べ、cの段階では若干の例外を除いて、ほとんどが単位文様と鈕座が一体となったデザインとなる。このことからb→cの流れが捉えられる。なお、cの段階で、伝倉吉例のように円文が涙滴形状に変形しているものは円文よりも新式に位置付けられる可能性がある。

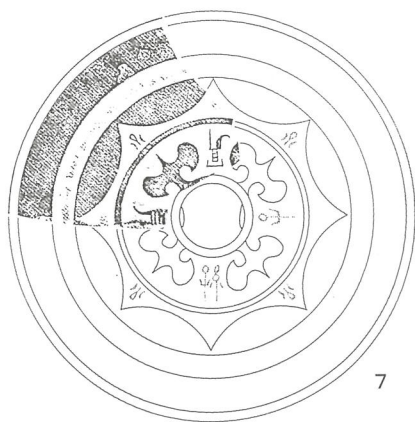
そして、残るaについては、出土例が少ないため確証はないものの、bより若干古い段階、dの地頭給についてはcとⅡ式の変換期に位置するものと考えられる。なお、同じくd段階の白鷺山例については、圈帯が線状に細くなっているものの鈕座の形態はaまたはbの段階にあるため、一概にcの新段階に位置付けるのは困難であり、さらに一層の検討が必要である。

最後に潤地頭給遺跡出土例の位置付けについては、圈帯が圈線となる、これまでにあまり知られていなかった例であること、形態がⅡ式で多く見られる先端の細長いタイプであることなどの要因から、この両型式のちょうど過渡期にある貴重な発見であると考えられる。

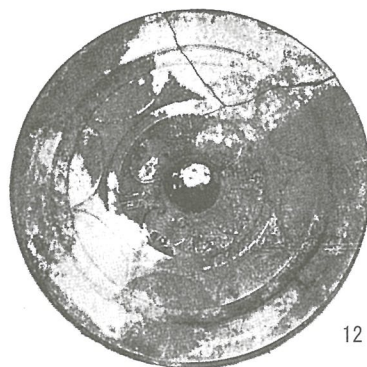
今回は、日本国内における事例を中心に検討したが、次回は中国や楽浪付近などの事例を加えてみたい。



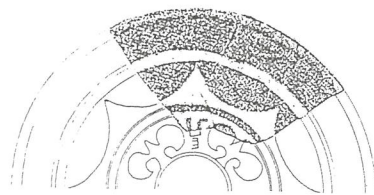
第3図 型式ごとの面径の比較



7



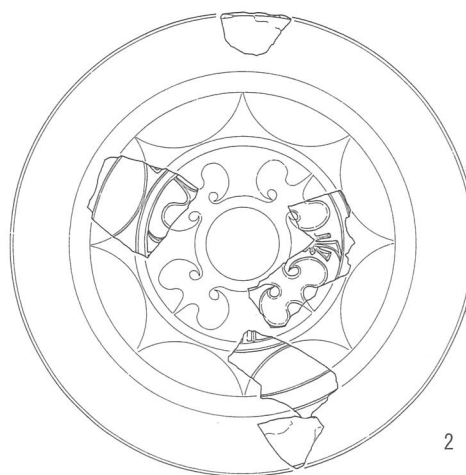
12



28

I - a

I - b



2



4



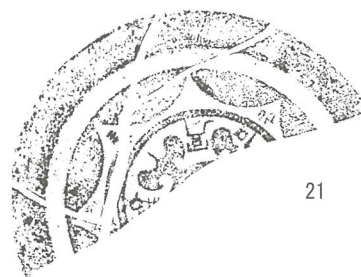
6



16



23



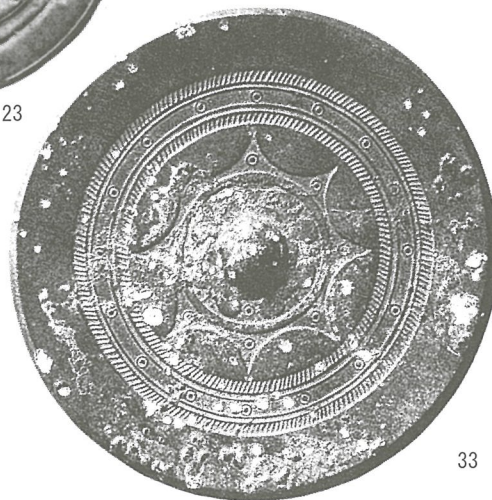
21



30

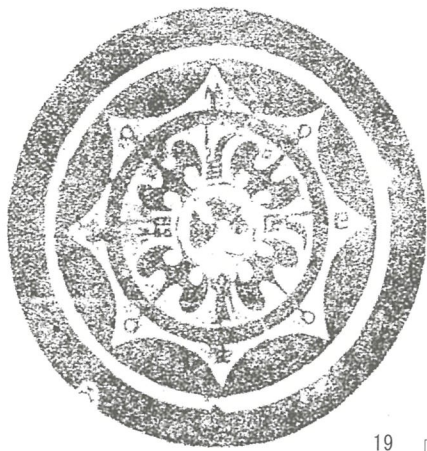


31



33

第4図 蝙蝠座鈕内行花文鏡 1

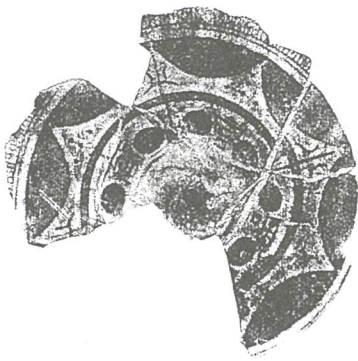


19

I - c

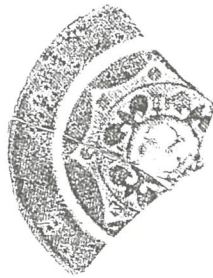


24



29

I - d



25

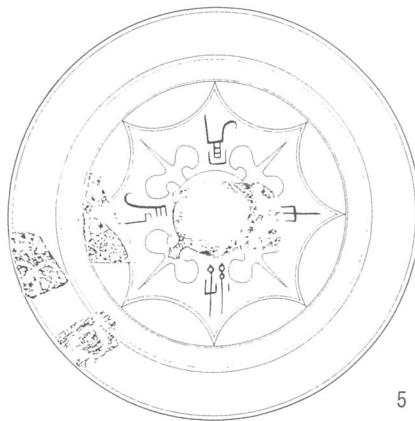


1

II



3



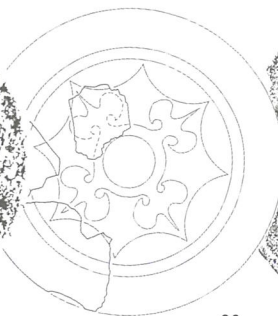
5



14



17



20



22



32

第5図 蝙蝠座鈕内行花文鏡2

国内出土の蛸蛸座鈕(内行花文)鏡一覧

No.	遺 跡 ・ 遺 構 名	遺構時期	所 在 地	鏡 種	直径 (cm)	銘 文	状 態	型 式	文 獻	備 考
1	潤地頭給遺跡 木棺墓	—	福岡県前原市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.5	(鈕座)□□至□□(位至三公)	破砕?	蛸蛸座Ⅰd	1	
2	三雲寺口遺跡 2号石棺墓	弥生終末	福岡県前原市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	15.5	(鈕座)長□千□	破片	蛸蛸座Ⅰb	2-49	
3	野方中原遺跡 3号石棺墓	古墳前期	福岡県福岡市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.6	なし	破片	蛸蛸座Ⅱ	3-49	工事中出土。
4	老司古墳 3号石室	古墳中期	福岡県福岡市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.8	(鈕座)君宜高官	完形	蛸蛸座Ⅰb	4-49	櫛歯文帯有り。
5	上大隈平塚古墳 大型箱式石棺	古墳前期	福岡県粕屋町	蛸蛸座鈕内行花文鏡	13.6	□□千□	破片	蛸蛸座Ⅱ	5-6-49	朱が付着。
6	神領 2号墳 御堂地区遺跡 F70トレンチ3号竈穴	古墳中期	福岡県宇美町	蛸蛸座鈕内行花文鏡	11.6	(鈕座)長宜子孫	完形	蛸蛸座Ⅰb	7-49	布が付着。
7	住居	弥生終末	福岡県筑紫野市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	13.6	(鈕座)長宜□□	破鏡	蛸蛸座Ⅰa	8-49	凹帯に赤色顔料を塗彩。
8	阿志岐古墳群 B群24号墳主体部	古墳前期	福岡県筑紫野市	蛸蛸文鏡	11.0	なし	破鏡	—	9	穿孔有り。破面研磨。
9	久原遺跡 III-4号墳	古墳中期	福岡県宗像市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.8	(鈕座)君宜高□ (連弧文帯)□□山石	破鏡	蛸蛸座Ⅰb	10-49	
10	汐井掛遺跡 203号土坑墓	弥生後期～ 古墳初期	福岡県宮若市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡	16.0	不明	破鏡	—	11-49	
11	汐井掛遺跡 6号箱式石棺墓	弥生後期	福岡県宮若市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡	16.9	(鈕座)□□宜□□	破鏡	蛸蛸座Ⅰ?	12-49	断面研磨。粘土目張上から出土。
12	谷頭遺跡 箱式石棺墓	弥生後期	福岡県飯塚市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.4	(鈕座)長宜子孫 (鈕座)長宜孫子	完形	蛸蛸座Ⅰa	13-14-49	1936年発掘。現物なし。
13	徳永川ノ上遺跡 4号墳E墓第4号棺	弥生終末	福岡県豊津町	蛸蛸座鈕内行花文鏡	13.0	(連弧文帯)位至□公	完形	蛸蛸座Ⅰb	15	鏡は布で覆われる。
14	前田山遺跡 9号石棺墓	弥生終末	福岡県行橋市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	9.8	(鈕座)長宜子君	破鏡	蛸蛸座Ⅱ	16-48-49	
15	潜塚古墳	古墳前期	福岡県大牟田市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡	13.5	不明	破片	蛸蛸座Ⅰ?	17-49	
16	伝 広島古墳群	古墳	宮崎県宮崎市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	13.3	(連弧文帯)山畑金石	完形	蛸蛸座Ⅰb	18-19-49	出土状況等不明。
17	東宮山古墳	古墳後期	愛媛県川之江市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	9.6	(鈕座)長宜□□	完形	蛸蛸座Ⅱ	20-21-49	
18	一の谷遺跡群 遺物包含層	古墳以降	香川県観音寺市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡?	16.1	—	破鏡	—	22-49	穿孔有り。
19	石消尾山猫塚古墳	古墳前期	香川県高松市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	14.0	(連弧文帯)生如山石	完形	蛸蛸座Ⅰc	23-49	盗掘を受けているため、破砕の 有無は不明。
20	朝田墳墓群 第3号台状墓	弥生終末	山口県山口市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.2	—	破砕鏡	蛸蛸座Ⅱ	24-49	
21	石畑山 2号墳第1主体	古墳前期	広島県福山市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.8	(鈕座)君宜高□ (連弧文帯)生如□□	破片	蛸蛸座Ⅰb	25-49	穿孔有り。破面研磨。
22	岡田山 1号墳	古墳後期	島根県松江市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.5	(鈕座)長宜子孫	破鏡	蛸蛸座Ⅱ	26-27-48-49	
23	伝 出雲国八東郡大庭村大字有	—	島根県松江市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.8	(鈕座)長宜子孫	完形	蛸蛸座Ⅰb	28	出土状況等不明。
24	伝 倉吉市上神	—	鳥取県倉吉市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	16.4	(鈕座)長宜子孫 (鈕座)位□□公	完形	蛸蛸座Ⅰc	29-49	出土状況等不明。
25	白鷺山 箱式石棺墓	弥生後期	兵庫県龍野市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.0	(連弧文帯)□□金石	破鏡	蛸蛸座Ⅰd	30-49	不時発見。破面研磨。 面径は表文獻51による。現物行方 不明。
26	東求女塚古墳 前方部竈穴式石室	古墳前期	兵庫県神戸市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡 (九弧)	16.4	(連弧文帯)位	破片	蛸蛸座Ⅰ?	31-32-49-51	
27	東求女塚古墳 後門部竈穴式石室	古墳前期	兵庫県神戸市	(蛸蛸座鈕)内行花文鏡	15.5	—	破片	蛸蛸座Ⅰ?	31-32-49	面径は表文獻51による。
28	加美遺跡 2号方形周溝墓	弥生終末	大阪府大阪市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.0	(鈕座)長□□□	破鏡	蛸蛸座Ⅰa?	33-34-35-36-49	
29	美濃山(王塚古墳?)	古墳	京都府八幡市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	11.5	(鈕座)君宜高官	破片	蛸蛸座Ⅰc	37-38-49	現物なし。
30	今林古墳群 6号墳	古墳中期	京都府南丹市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.6	(鈕座)長宜子孫	完形	蛸蛸座Ⅰb	39	天保9年と安政5年の2回にわたり 発掘。
31	御墓古墳	古墳前期	岐阜県可児市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	10.9	(鈕座)長生宜子	完形	蛸蛸座Ⅰb	40-41-42-50	
32	熊子塚 10号墳	古墳	静岡県磐田市	蛸蛸座鈕内行花文鏡	12.0	なし	完形	蛸蛸座Ⅱ	43-44-49	
33	軍配山古墳	古墳前期?	群馬県玉村町	蛸蛸座鈕内行花文鏡	16.0	なし	完形	蛸蛸座Ⅰb	45-46-47-48-49	

註

1. 三宅米吉 1897「古鏡」『考古学雑誌』1-5 日本考古学会
2. 高橋健自 1909「本邦鏡鑑沿革考（第三回）」『考古界』7-5 日本考古学会
3. 富岡謙蔵 1918「北部九州に於ける銅剣銅矛及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」『考古学雑誌』8-9 日本考古学会
富岡謙蔵 1920『古鏡の研究』臨川書店
4. 中山平次郎 1919「古式支那鏡鑑沿革」5『考古学雑誌』9-6 変形鈕座（蝙蝠座鈕）を持つものを甲式、四葉座鈕をもつものを乙式として分類。
5. 後藤守一 1926『漢式鏡』
後藤守一 1977『古鏡聚英』上 東京堂出版
6. 矢島恭介 1943「夔鳳鏡と獣首鏡とに就いて」『考古学雑誌』33-5 日本考古学会
7. 梅原末治 1925「北朝鮮発見の古鏡」『鑑鏡の研究』臨川書店
8. 前掲註7の本文中では「突帯」。
9. 前掲註7の本文中では「円圈」。
10. 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
11. 高橋徹 1986「伝世鏡と副葬品」『九州考古学』60 九州考古学会
12. 立木修 1993「雲雷文帯連弧文鏡考」『季刊考古学』43 雄山閣出版
13. 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55 国立歴史民俗博物館
14. 前掲註7。「葉紋の尖端は帯を通じてこの部にまで及び」とある。
15. 前掲註10。樋口氏の分類に当てはめると「B c u」となるが、取り上げられていない。

一覧表文献

- 1) 江野道和・江崎靖隆 2005『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書89 前原市教育委員会
- 2) 柳田康雄 1983「寺口地区の調査-2号石棺墓」『三雲遺跡』IV 福岡県教育委員会
- 3) 柳田純孝 1974『野方中原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書30 福岡市教育委員会
- 4) 高倉洋彰 1989「石室出土の遺物-銅鏡」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書209 福岡市教育

委員会

- 5) 森貞次郎 1961「福岡県粕屋郡上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12 九州考古学会
- 6) 森貞次郎・西健一郎・高倉洋彰 1983「上大隈平塚古墳出土の蝙蝠座鈕内行花文鏡」『九州考古学』58 九州考古学会
- 7) 平ノ内幸治 1984『神領古墳群』宇美町教育委員会
- 8) 奥村俊久 1982『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書15 筑紫野市教育委員会
- 9) 山野洋一 1982『阿志岐古墳群』筑紫野市文化財調査報告書7 筑紫野市教育委員会
- 10) 清水比呂之 1988『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書19 宗像市教育委員会
- 11) 池辺元明 1980『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会
- 12) 池辺元明 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』28 福岡県教育委員会
- 13) 児嶋隆人 1937「内行花文鏡を出せる箱式石棺の新例」『考古学』8-1 東京考古学会
- 14) 児嶋隆人・藤田等 1973『嘉穂地方史 先史篇』嘉穂地方史編纂委員会
- 15) 柳田康雄 1996『徳永川ノ上遺跡』2 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告7福岡県教育委員会
- 16) 長嶺正秀編 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会
- 17) 森貞次郎・渡辺正気 1975『潜塚古墳』大牟田市教育委員会
- 18) 宮崎市史編さん委員会 1978『宮崎市史 続編』上
- 19) 宮崎県総合博物館 1980『日向の古墳展 図録』
- 20) 三木文雄 1971「妻鳥陵墓参考地東宮山古墳の遺物と遺構について」『書陵部紀要』23
- 21) 名本二六雄 1985「愛媛県古鏡の研究史と現在の課題（上）」『遺跡』27 遺跡発行会
- 22) 西岡達哉ほか 1990『一の谷遺跡群』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 23) 梅原末治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告12 京都帝国大学文学部
- 24) 山本源太郎ほか 1983『朝田墳墓群』VI 山口

県教育委員会・建設省山口工事事務所

- 25) 高倉浩一 1981「石鏡山第2号古墳」『石鏡山古墳群』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター
- 26) 梅原末治 1923「出雲国八束郡岡田山古墳調査報告」『中央史壇』7-5・6 国史講習会
- 27) 山本清・門脇俊彦・松本岩雄ほか 1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 28) 後藤守一 1977『古鏡聚英』上 東京堂出版
- 29) 倉吉博物館 1983『古墳時代—伯耆国』
- 30) 松本正信・池田次郎・今里幾次 1984「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』4 龍野市
- 31) 梅原末治 1925「武庫郡住吉町呉田の求女塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2 兵庫県
- 32) 渡辺伸行 1984「東求女塚古墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 33) 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 1985『加美遺跡現地説明会資料 大阪市平野区加美東6丁目所在』
- 34) 田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える』43 古代を考える会
- 35) 大阪府泉北考古資料館 1987「冬季特別展 大阪府の古鏡展」『泉北考古資料館だより』31
- 36) 小田富士雄・藤丸詔八郎・武末純一 1991『弥生古鏡を掘る—北九州の国々と文化』北九州市立考古博物館
- 37) 梅原末治 1920「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査報告』2 京都府
- 38) 後藤守一 1926『漢式鏡』雄山閣出版
- 39) 福島孝行 2001「今林古墳群—今林6号墳出土遺物」『京都府遺跡調査概報』97 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 40) 柴田常恵 1902「美濃国可児郡広見村伊香陵山白山社古墳」『東京人類学雑誌』18-202 東京人類学会
- 41) 小川栄一 1941「陵山古墳」『岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』10 岐阜県
- 42) 可児郷土歴史館 1982『特別展図録 郷土の古墳時代』
- 43) 岡崎敬 1978『日本における古鏡発見地名表 東海地方』
- 44) 磐田市史編纂委員会 1992『磐田市史 史料編1』考古・古代・中世
- 45) 後藤守一 1937「上野国佐波郡五村町大字角淵

古墳」『古墳発掘品調査報告』

- 46) 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図録目録 古墳遺物編(関東Ⅱ)』
- 47) 相川龍雄 1933「佐波郡玉村町角淵軍配山古墳」『上毛及上毛人』156
- 48) 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- 49) 埋蔵文化財研究会編 1994『倭人と鏡—日本出土中国鏡の諸問題』
- 50) 埋蔵文化財研究会編 1994『倭人と鏡 その2—3・4世紀の鏡と墳墓』
- 51) 白石太一郎・設楽博己編 1994「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』56 国立歴史民俗博物館

参考文献

- 梅原末治 1935「古鏡鑑の新資料二例」『人類学雑誌』50-3 東京人類学会
- 寺沢薫 2005「古墳時代開始期の暦年代と伝世鏡論(上)」『古代学研究』169 古代学研究会

図版の出展については、一覧表に掲載の文献より引用。一部、縮尺等の改変を行う。